
生涯学習社会における大学体育の役割と課題

徳山郁夫¹ 松岡信之²

¹千葉大学 ²国際基督教大学

Role and Task of Physical Education Program in University for Lifelong Learning Society

Ikuo TOKUYAMA¹ and Nobuyuki MATSUOKA²

¹ Chiba University, ² International Christian University

Abstract

The aim of this paper is to show the teaching method of college physical education in order to satisfy the needs of lifelong learning society.

As various problems have appeared in technological society which has brought us the comfortable way of life, it has been pointed out that it is time to reconsider our modern way of life from the global viewpoint.

Therefore, it is significant to consider education of all the stages in this context, and lifelong learning society has become one of the key concepts in which the idea of the pursuit of human dignity and self-existence is most worthy. College physical education is also to be considered in relation the idea of lifelong learning society.

Among various teaching materials of physical education, gymnastics and sports are expected to be the best because they directly concern the recognition of self-existence although they are normally regarded as the useful means in order to strengthen human body. In the practice of gymnastics and sports the following viewpoints are especially to be emphasized:

1. Students should pay more attention to the control of their bodies than to the mere acquisition of skills and their related knowledge.
2. Teachers should lay stress on the learning process of the control of students' bodies rather than the results of their learning.
3. The facilitation of the process above rather than the mere introduction of skills and knowledge should be emphasized.

I. はじめに

近代社会は、科学技術の発展によって人間の生活を大きく変革し限りない発展を約束したかに見えた。しかし、レイチェル・カーソンは、その著書「沈黙の春」¹⁾で自らの環境を汚染させながら発展する近代社会の行く手に大きな疑問を投げかけた。またローマ・クラブによる「成長の限界」²⁾は、人口、食糧生産、工業化、汚染、および再生不可能な天然資源の消費の5つの要素が幾何級数的に増加しているデータを克明に示し、近代社会の発展に限界があることを指摘した。これらの警告は人類の限りない発展という希望が暗礁に乗り上げたことを示した。しかし、その後も工業化は進展し、さらに多くの資源が消費され地球規模の

著しい自然環境の破壊を進行させてしまった。このことは、資源の大量消費による工業化社会が人間を幸福にするという構図が破局を迎えたことを意味するものである。

このような構図の破局は、これまでの社会における基本的価値観の変換を引き起こした。したがって、社会の価値観を伝達する教育の役割にも転換が必要となったのである。すなわち、生産と消費の拡大に価値を置く教育から、地球環境の保護や個人の人生の充実に価値を置く教育へと転換して行くことが必要となるのである。

教育の目標が工業社会に有益な人材を養成することから、個人の人生を充実させ自己実現を図ることと転換されるならば、教育は学齢期のみにな

されるものではなく生涯を通じてなされるものでなければならない。したがって、今日の生涯学習³⁾という概念は社会の価値観の変換と密接に関連するものとしてとらえなくてはならない。さらに、現在問題となっている大学教育の改革もこのような社会の動向を視野に入れ、生涯学習の概念の中で考える必要がある。

本論文は、社会の動向から生涯学習の必要性およびその課題を明かにし、その課題に具体的に取組む大学体育の方法を検討するものである。

II. 生涯学習社会と一般教育

ここでは生涯学習社会へ移行する社会的動向を検討し、その中から見出される大学一般教育の課題を論じる⁴⁾。

(1) 生涯学習社会の到来

生涯学習社会が提唱される背景には、先に述べた時代の転換期という要因とともに、自由時間の増大による人生設計の変化が挙げられる。平均余命の伸びと労働時間の短縮は、人生における自由時間を増大させ⁵⁾、定年以降の20年に及ぶ時間を含め21万時間の自由時間が想定させる時代を招来させたのである。このように増大する自由時間をどのように活用するかということがこれからの社会の課題となる。

わが国の学校制度は、近代化に必要な人材を多く輩出するという社会の要請を受けて明治時代に制定された。そこでの教育内容は工業化社会が必要とする科学的な知識と技術の伝達に重点がおかれ、実利的側面を重視する傾向が強かった⁶⁾。しかし、「成長の限界」が指摘するように社会の工業化による社会の発展に陰りがさしてきたことともに、平均余命の伸びと労働時間の短縮による自由時間の増大から、教育の目標は工業化社会が要請する人材を輩出することから、個性の尊重を基盤とした生活の目的や自己存在の価値を考えることへと大きく転換することが迫られているのである。言い替えれば、教育の目標が20世紀の工業化社会という人類の歴史の中での特殊な時代に必要知識の獲得に傾いてきたことから、人類にと

って普遍的な課題の探求へと、軌道を修正しなくてはならなくなってきたのである。生涯学習は、このような人類の普遍的な課題を追求することを目的として展開されるものでなくてはならない。

このように生涯学習の目標を個人の生活の目的や自己存在の価値を考えるとといった“自己発見”におくとすれば、これまでのような工業化社会に役立つための画一的な人材の養成といった教育の構造は大きく変革されなくてはならない。個人の生活の目的や自己存在の価値は他人によって決められるものではなく、その内容はきわめて多様だからである。

図-1は、生涯学習社会への教育構造の転換を示すものである。教育の目的は、工業社会への人材の供給から、民主主義の成熟に向けた個人の存在意義の確認へと移行する。これにともない教育内容も、知識や技術の伝達から自己の主体的な関わりへと転換される。学習者は、知識や技術を覚えるという学習から、思考の展開を中心とした考え方の学習へと学習活動を転換して行くことになる。一方、指導者の役割は、知識や技術などの情報を学習者へ一方的に流すことから、思考の展開を促すことへと転換される⁷⁾。この指導者の役割の転換は“teacher”から“facilitator”と表現できる。

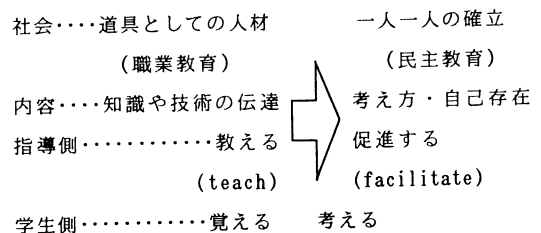


図-1 生涯学習社会への教育の転換

大学教育も、以上のような生涯学習社会への転換ということを踏まえて検討されなければならない。新しい設置基準では「教育課程の編成に当たっては、大学は、学部等の専攻に係わる専門の学芸を教授するとともに、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう

適切に配慮しなければならない」と規定されている。このことは、大学教育が狭い専門分野の知識や技術の伝達に終わってはならないことを示すものである。この基準にある「幅広く深い教養」、「総合的な判断力」、「豊かな人間性」ということと、生涯学習社会の課題である“自己発見”は密接に関連づけてとらえていかなければならないものである。

(2)自由と責任

現代が大きな転換期を迎えているという指摘は、資源の枯渇や自然の破壊だけに由来するものではない。急激な技術革新が進行する中で人々は科学技術の推進のみに目を奪われ豊富な物質と安楽な生活に陶醉し人間の尊厳を見失い、その結果、利潤を生じるために限りない生産と消費の循環を促進するという構図を作り上げ、その構図の中に幸福感を期待するようになった。しかし、この構造には人間の貪欲さを生み出す作用が内包されているために、人々は欲望を操作されその欲望を満たすということを繰り返さなければならなくなっていたのである。

フロムは、このような社会構造のなかで、私たちが物を〈持つこと〉によって自己の存在や価値を確認するという様式に慣れてしまったことを指摘し、人々が物質的豊かさを極めた真只中で「孤独で、不安で、抑鬱的で、依存的で、必死になって節約に努めている時間を一方でつぶして喜んでいる」⁹⁾と述べている。さらにフロムは、この〈持つこと〉に執着する考え方は、知識や健康に対する考え方にも深く影響を及ぼし、人間らしさを損ねる要因となっていると指摘し、〈持つこと (to have)〉に代えて〈あること (to be)〉に基づく人間社会の可能性を追求している。

〈あること〉を基盤とする考え方とは何ものにも執着やこだわりを持たず、たえず成長することに価値を見いだすことである。それは、固定化した型や態度ではなく、流動的な過程に着目し、他者と共存し、関心をともにする関係性を重視することである。

シューマッハは、人間が科学技術の開発による大量生産と大量消費に没頭し、再生不可能な自然資源を使い捨て、自然を破壊する生産体制を作ってきたと指摘した⁹⁾。そして、そのようにして作られた現代の経済構造が、生産過程での喜びや満足を見落としてきたと述べ、人間の尊厳を見失わない科学技術の開発を探求することが必要であると主張している。

デュボスは、人間が環境との密接な関わりのなかに存在し発展してきたにもかかわらず、近代社会はその人間の本性を省みることを忘れ、その結果、自然を破壊し環境を醜悪なものにしてしまったことを指摘している¹⁰⁾。以上のようなフロム、シューマッハ、デュボス等の指摘は、まさに設置基準で言う「豊かな人間性」とは何かということへの問いかけである。彼らの指摘によれば、人間は科学技術の発展という巨大な知的遺産を“人間性”を豊かにするために的確に行使できなかったのである。

このように、これまでの科学技術に対する考え方も転換期を迎えている。しかし現在必要なことは、いたずらに科学技術を批判することではなく、その知的遺産を「豊かな人間性」に結びつける叡知である。人類は、科学技術の発展という恩恵を受け自然を開発し資源利用を拡大して〈持つこと〉への欲求を満たしてきた。しかし、私たちは自らが生きていると同時に、他の生物や次世代の人々に対する重大な責任を負っていることを忘れてはならない。現在、私たちは科学技術を「豊かな人間性」のために行使しているのだろうか。科学技術の発展の恩恵として獲得した自由の行使について、あるいはその責任についてどのように学んでいるのだろうか。このような人間性をめぐる課題こそは、これからの大学教育の主要な部分を構成するものである。

(3)総合する能力

前述のようにフロムは、あらゆるものを〈持つこと〉に執着する現代の人々が知識さえも〈持つこと〉という観念でとらえるようになってい

指摘している¹¹⁾。今日、学問が一層細分化と高度化を進行させる中で、“幅広い教養”ということはどのように解釈されるであろうか。つまり、どれだけの分野にわたるどの程度の知識を持つことを要求されているのであろうか。また、“深い教養”とは、どのようなことを意味するのであろうか。各大学はこの間に答えを出さなければ、幅広く深い教養という目標は美辞麗句として掲げられものにとどまり、形骸化を待つだけのものになりかねない。

ベルは、生産ならびにそこで使われる知識の種類を機軸として、社会の推移を前工業化社会、工業化社会、脱工業化社会に分類した¹²⁾。今日の社会は、科学的なものの見方を基盤とした実利的な知識を重視して発展してきた。しかし、その中で日常的な知や人間の尊厳を問う知への関心が軽視されてきたのである¹³⁾。

社会の機械化と分業化が進行する中で、人々は日常の生活までも専門家や機械に依存するようになった。このような社会は人々に社会の歯車の一つなることを要求し、分業化を促進する専門的な知に価値を置く一方で、日常生活につながる普遍的な知の価値を軽視し、人間を全体として見つめることを怠ってしまっている¹⁴⁾。「僕は、全体としての人間だ。僕が全体としての自己形成をするのを助け、僕の潜在能力を発揮させてほしい¹⁵⁾」という学生の声は、これを象徴的に物語っている。

いかに社会の生産体制が変化しようとも根本的な人間の営みは変わらない。話し、食べ、歌い、眠り、喜び、癒し、死を看取るという普通の生活は、社会の歯車としての役割に関わらず誰にも共通することである。本来の豊かさはこの普通の生活の質の向上を図ることで実現されるものである。しかし近代化の流れの中ではこのような普遍的な知を総合する視点は見失われ、それを探求し育成することへの関心が蔑ろにされてきた感がある。

学問が細分化され、高度な知識が次々と生み出される今日の社会では、人々は専門的な知識だけを身につけることに追われがちである。また、分

業化が極度に進行すると、自分の専門外の幅広い知識は、活用することのない不要なものとなりかねない。専門的な知識や能力を“図”に例えると、その“地”となるものを普遍的な知とすることができる。“図”の成立は、“地”の形成が基盤となるものである。分業化社会は、人間を全体として見ることを軽視し、人々の生活から“地”に相当する部分を削除してしまい、“地”としての普遍的な知を育むための他者との交流や自然との関わりを貧しいものにしてしまっている。幅広い知識、教養とは、細分化する専門領域の知識を総合する能力と繋るものである。したがって、これからの教育の課題は、細分化した専門知識を総合する能力（総合的判断力）の開発であり、専門知識を支える“地”の部分としての「幅広く深い教養」を持つことであると言することができる。そのために、総体としての自己の存在を問い直し、人間の存在の意味を考える教育の展開が必要とされるのである。このような教育は大学生という人生の一時期にだけ考えるものでなく生涯にわたって考え続けられるものである。ここに、生涯学習社会が提唱されている基盤がある¹⁶⁾。

(4) 暮し・からだ・経験

著者らは、多様な知を総合することの必要性を指摘し、その視点として「暮し」と「からだ」を挙げた¹⁷⁾。総体としての人間が生きる時空間を「暮し」とし、総体としての人間を「からだ」と表現し、この「暮し」と「からだ」に根ざした人間の普遍的な知の育成を一般教育の課題とすることを提言している。図-2は、総体としての「からだ」の成り立ちを表すものである。自らの「からだ」は生物としてのヒト、あるいは個体という側面と、歴史や文化を反映する社会的側面、そして生態系を含めた自然的側面を総合して成り立っている。

このような視点に立って「からだ」を育むことを考えると、体育の目標はスポーツ技術の修得や強靱な身体づくりにとどまるものでなく、自己を知り文化、社会あるいは自然と主体的な関係を結

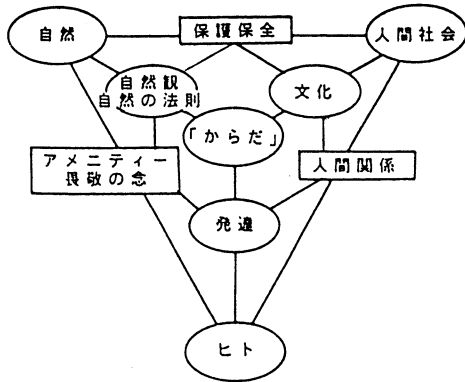


図-2 「からだ」の成り立ち

ふこととなり、体育活動は「からだ」のフィールド・ワークであるという視点に到達するのである¹⁸⁾。このように「暮らし」や「からだ」を考えることは、総合的な視点を持つということにつながるものである。

中村は、今日の人々が科学というものの見方を通さずには現実を見ることができにくくなっていると指摘している¹⁹⁾。科学的なものの見方は、客観性、普遍性、論理性を基盤にした要素還元的なものの見方と言える。このような特徴を持つ科学的なものの見方は、工業化社会に重視された知であった。

しかし、科学的、要素還元的なものの見方にも限界があり、見え難いものがある。中村は科学的なものの見方が無視し排除してきたものとして固有世界、事物の多義性、身体性をそなえた行為を挙げている²⁰⁾。私たちの日常の生活は、主体的な経験を基盤とした総合的な知の形成のもとに現実を見ることによって営まれてきたものである。しかし、客観性を重視する科学的なものの見方が主流を占めるにしたがい、日常の生活も専門家や機械に依存する傾向が強くなり、自らの身体に根ざした主体的経験までも軽視するようになっているのである。

科学的なものの見方は客観性という立場を重視したものであり、それは観察者の影響を制御した見方である。しかし、私たちが生きている現実で

は、純粋に客観的な立場をとって存在することはあり得ない。これに対して経験を通したものの見方は、自らの身体を通した主体的な立場からのものの見方となる。

「からだ」は行動の主体であると同時に自らが操作する対象という立場にもなる。また、私たちは他者の観察の影響を受けながら社会的な存在となる。さらに、他者を観察することから自らを類推することもある。このように、「からだ」自体が主体的な関係の中に成り立っているものと考えなければならない。

この主体的なものの見方を敢えて著者らは「経験」という言葉で表現している²¹⁾。「経験」は、観察者という立場を超え身体を通して能動的に働きかけることと、それに伴って得られる身体感覚への意識の集中を含むものである。

「経験」を通したものの見方には、それなりの限界がある。しかし、人類が受け継いだ科学技術を責任をもって自由に行使するには、現実社会に生きる「経験」を基盤とした主体の確立が求められるのである。

このように現実を自己の主体性との関係においてとらえることによって、それぞれの土地に根付いたもの²²⁾の価値が見えてくるのである。また、それぞれの主体としての「からだ」に見えるものを大切にすることで、個性の尊重が可能になるのである。

大学教育では、専門的知識の伝達だけでなく、自らの「経験」から主体的に知を形成することを目指した教育が展開されなくてはならない。この意味から、「からだ」を通した「経験」から得る知の意義は重要である。

Ⅲ. 大学体育の課題

生涯学習社会への移行期に、大学が果たす責務は大きい。大学は、生涯学習社会という要請に応える豊富な知的、人的、物理的資源を備えた拠点であるという点で注目される。しかし、それだけでなく、大学自体が社会の変化を的確にとらえ、新しい知のあり方、人類の進むべき方向へのリー

ダーシップを発揮できるよう、その教育内容を再編成しなくてはならない。

国立教育研究所の調査は、余暇の過ごし方として健康、スポーツ、趣味というものへの志向が多いことを報告している²³⁾。しかし、私たち体育の指導者は、多くの人々がこれらの活動へ志向していることに満足せず、スポーツ活動を通して自己の確認や自己発見が果たせる体育のあり方を検討しなければならない。

このような役割を想定する中で、大学体育の課題を検討する。

(1) 体育指導の転換

ここでは生涯学習概念の導入による教育の転換に沿った、体育教育の再編成について述べる。

体育は、従来から“人間形成”を目標に掲げこれに取り組んできた。しかし、必ずしもスポーツを行うことによってこの目標が達成されるものでない。すなわちスポーツのルールを紹介したり身体を動かすだけでは“人間形成”という目標が安易に達成されるものではない。この“人間形成”という目標を達成するには、スポーツとの関わり方が明らかにされなければならない。

スポーツ技術の上達や現代的な意味での健康増進や身体強化は、必ずしも人類の恒久的な課題ではなく、近代文明のもとに生じている特殊な現象と見ることもできる。著者らは、このような視点に立ち体育の目標を「自己発見」とし、自らの身体感覚を通して自らに出会う活動としての体育の方法論を検討し新たな大学体育の展望を提唱してきた²⁴⁾。

生涯学習の課題は、特殊な知識や技術を身につけることに重点が置かれているのではなく、人類の普遍的な価値を探求することである。この課題を達成するうえで、自己発見を目標とした身体活動は重要な役割を担うと考えられる。

一般教育として展開される体育教育の課題はスポーツ技術の習得にとどまるものではない。その課題は人類の恒久的な問いかけに沿って、人間らしさを求め自らの探求を行うことである。著者ら

は、このような立場から大学体育の目的として“自らの「からだ」を知る”ことを挙げいわゆるスポーツ技術の習得とは異なる目標を設定してきた。

体育の具体的な目標を転換することにとめない。指導者は学習者の視点を、伝達される知識や技術を習得することから、自らの「からだ」の成立を理解することへと転換させなければならない。すなわち、学習者は身体運動を通して、1)「からだ」を知る、2)「からだ」で知る、3)「からだ」で考える、4)「からだ」で表現する、5)暮らしに「からだ」を取り戻す、という課題と取り組みながら自己と出会うのである²⁵⁾。

また、身体運動に伴う感覚やその現象の考察を時間経過に沿って整理することもできる。身体運動に伴う時間経過に着目して「からだ」を経験する課題としては次の視点が想定される。

a. 器官を強化する過程

スポーツなどの身体運動は、身体に一過性の変化をもたらす一方で、継続的な身体運動は身体に順化を生じさせる。加齢に伴う身体の発達や衰退の過程を観察の対象とすることから、自己存在における動物としての側面が認識できるのである。

b. 技の習得・習熟の過程

各スポーツ特有の技術や戦術の習得・習熟の過程は、私たちが「からだ」の使い方を学び環境に適應する過程そのものである。新しい運動課題に能動的に取り組み「からだ」の使い方を学び、繰り返すことによって動作を熟練させる過程は、学ぶことによって開かれる様々な可能性を認識させるものである。

c. 技や体力の発揮の過程

体力や技は、常に同一の条件下で発揮されるものではなく、異なるさまざまな状況下で発揮されることが要求されるものである。その時々々の状況を判断する能力が求められたり、逼迫した緊張のもとで獲得した体力と技の発揮にベストを尽くすことが求められるものである。この新しい状況への対応の過程は、それまでの習得過程を確信させ

り、新たな学習課題を確認することにつながる過程である。この過程をよりよく経験することによって人々は新しい課題に積極的に取り組み、より実行きのある自己に出会う可能性が開かれるのである。

d. 「からだ」による交流の過程

「からだ」は、その生理的な変化や身振りや他者との間合いの取り方などの方法で、意志や情緒や体調を表現している。このような非言語的な表現を含む交流の過程を学ぶことは、自己の存在を確認する上で重要な役割を果たすものである。また、「からだ」は、自らの直接的な観察のみでは知り得ない側面を備えている。したがって「からだ」による他者との交流は、他者を見ることによって自己を類推し、他者の目に投影される姿から改めて自己を省みたり、他者への働きかけとこれに対する応答から自己を確認することなどを可能にする重要な役割を担うものである²⁶⁾。私たちは、スポーツ場面からスポーツの技術を学ぶだけではなく、スポーツという場面の中で、協同する味方や敵対する相手との関係を通して自己を学ぶ多くの可能性を持っているのである。

生活目標や自己存在の確認は、自らの「からだ」を知り、主体的な「からだ」を取り戻すことによって可能となる。私たちが現実社会で生きて行くということは、自己というマイクロコスモスが宇宙というマクロコスモスに働きかけ、その関わりを主体的に処理するということである。体育教育の目標は、自己の感覚をマクロコスモスとの関わりについての思考に十分に活かすことのできる「からだ」を育成すること、すなわち主体的な情報処理の能力を育成することである²⁷⁾。

体育指導の課題を人類恒久の課題である自己存在の確認へと転換し自己発見を求めることとすると、その答えは常に身近な「からだ」の中にあるのである。しかし一方で、「からだ」についての広範な考察を身体的な情報のみで展開しようとすることには限界があると同時に、その課題の奥行

きは深く安易に答えの得られるものでないことも確かである。「からだ」についてさまざまな視点から問いかけがなされより深い考察が促されなければ、課題達成は浅薄なままにとどまってしまう可能性が大きいことが考えられる。そこで、言語的な情報による配布資料などを通じて課題意識を喚起し、「からだ」のさまざまな側面についての考察に身体的な情報がよりよく反映されることを促進する工夫も必要となる。

以上のように「からだ」を通した知の側面に着目したとき、スポーツという教材が生涯学習に展開する大きな可能性に期待がかけられる。また、このように人類の恒久的な課題へのアプローチとして再編されてこそスポーツ文化と言えるものである。

(2)制度的な課題

生涯学習社会への移行期に大学は、知の拠点として重要な役割を発揮しなければならない。研究・教育の資源を十分に備えている大学が社会の要請に応えて行くことは大学の重要な責務の一つである。

大学は、学習という概念に対する社会の変化に対応して、多様な年齢層の受講に応えられるよう、そして繰り返し学んでも新鮮に感じられるよう実行きのある多様な授業内容への再編を行うことが課題となる。しかしそのような授業内容の再編とともに、社会の変化に対応できるような制度への変革を進めなければならない。

公開講座の積極的な開催によって大学を公開して行くことはもちろんのことであるが、そのほかにも18歳人口の低下、高齢化社会の到来、自由時間の増加などに伴う大学の就学年齢の変化や修学方法の多様化が想定される。したがって、授業開設の方法、修学方法などについて検討を行い、制度的な整備を行うべきである。授業の開設については市民への公開講座だけではなく、正規の学生用の授業を科目等履修生へ公開することから、夜間開設あるいは要請のある団体等への出向授業まで、あらゆる可能性を検討すべきである。

また、体育については、大学に既存する体育施設を有効に活用するという意味からも重要な役割を果たすことが期待されるが、更衣室、シャワー設備などの付帯施設の充実、ケガや事故に対する補償に関する制度の検討が必要になる。

IV. 総括

社会における価値基準の転換にともない、教育への期待も大きく転換されることは論を待たない。これに自由時間の増大、あるいは高齢化社会の到来という状況は、教育機関の果たすべき役割の転換を余儀なくさせる。すなわち、労働のための適性を獲得するために学ぶという姿勢から、自己の人生目的や自己の存在を学ぶことへと教育の目的が転換される。

この教育の転換こそは、教育を本来の姿に修正するものであり、その内容は普遍的な人間の尊厳に関わるものが展開されなければならない。このような教育の姿勢に立ちかえり、この課題を達成するために「自己発見としての体育」という視点から体育の役割と課題を再編成することを急がなければならない。また、多様化する学習者の要請に備え大学における教育制度を、これに応えられるように見直しを図らなければならない。

注 釈

- 1) R. カーソン「沈黙の春（生と死の妙薬）」新潮社、1964
- 2) ローマ・クラブ「成長の限界」ダイヤモンド社、1972
- 3) 川野辺敏（国立教育研究所）は、筑波大学フォーラム「生涯学習社会における大学教育・大学体育を求めて」（1993）の基調講演で生涯学習社会の概要を説明している。
- 4) 新しい大学設置基準からは「一般教育」という言葉は削除された。各大学は個々にこれに当たる教育を行うとともに、各々の呼称で扱うことになる。千葉大学では、'94年度より従来の「一般教育科目」を革新し「普遍教育科目」という名称で実施される。
- 5) 松田は、平均余命の伸びと労働時間の短縮などの要因を考慮し、人生を70万時間とするうち、労働時間が約7万時間（約10%）であるのに対して、自由時間は21万時間（30%）であるとした。この増大しつつある自由時間をいかに活用するかという人生設計を余暇社会の重要な課題としている。松田義幸「現代余暇の社会学」誠文堂新光社、1981
- 6) 徳山郁夫、松岡信之「一般教育に求められる転換—環境教育とからだの見直しの必要性—」千葉大学教養部研究報告B-26, 279-284, 1993
- 7) 学校体育では「めあて学習・ねらい学習」という名称のもとに、体育科の目的を、スポーツ技術の習得から運動教材を通じた思考の展開を学ぶという方向への転換を図り、その方法の検討を進めている。日本体育学会第44回大会(1993)の体育科教育学専門分科会シンポジウムでは、この実践的検討を課題としている。
- 8) E. フロム「生きるということ」紀伊國屋書店、P, 20, 1977
- 9) E. F. シューマッハ「人間復興の経済(スモールイズ・ビューティフル)」佑学社、1973（なお、同書は講談社学術文庫からも訳出されている）
- 10) R. デュボス「人間であるために」紀伊國屋書店、1970
- 11) E. フロム；前掲書、p, 52
- 12) D. ベル「脱工業化社会」ダイヤモンド社、1975
- 13) 著者らは、現代社会の特徴を“身体の遊離”、“隔離された生活”、“知の階層性”という表現で示した。徳山郁夫、松岡信之「一般教育としての体育の展望—暮らしの中の『からだ学』の提唱—」千葉体育学研究、第14号、p, 63-75, 1991
- 14) 徳山郁夫、松岡信之；前掲書。著者らは一般教育の課題の具体的な解釈を人間の普遍的な生活の再評価に見いだすことを提唱してきた。
- 15) A. ブルーム「アメリカン・マインドの終焉」みすず書房、p, 377, 1988

- 16)生涯学習社会の現状については、次の資料がある。国立教育研究所生涯学習研究部編「生涯学習化社会の現状」1993
- 17)徳山郁夫、松岡信之；前掲書
- 18)徳山郁夫、松岡信之「ボディ・センサーによるフィールド・ワークとしての体育」千葉体育学研究、第12号、p,51-56、1989
- 19)中村雄二郎「臨床の知とは何か」岩波新書、p,3、1992
- 20)中村；前掲書、p,9
- 21)徳山郁夫、松岡信之「体育における一般教育－経験知の位置づけ－」千葉大学教養部研究報告B-25、p,259-265、1992
- 22)イリイチは、“土地に根付いた”文化、技術について“ヴァナキュラーな”という言葉で説明し、その重要性を強調している。I.イリイチ「生きる思想」藤原書店、1991
- 23)国立教育研究所；前掲書
- 24)徳山郁夫、松岡信之；前掲書、1989、1991
- 25)徳山郁夫、松岡信之；前掲書、1992
- 26)例えば他者の背中を観察することから自らの身体の全体像を作り上げている。市川は「私にとっての私の対他者身体」と「他者の身体」という概念で説明している。市川浩「精神としての身体」勁草書房、p,27、1975
- 27)松岡信之、徳山郁夫「一般教育としての体育－情報処理能力を視点として」一般教育学会誌、第11巻、第2号、p,118-120、1989
- 書店、1970
- 7.エンデ、M.「モモ」岩波書店、1976
- 8.ファイアーベント、P.K.「知とは何か三つの対話」新曜社、1993
- 9.フロム、E.「生きるということ」紀伊國屋書店、1977
- 10.廣川洋一「ギリシャ人の教育教養とは何か」岩波新書、1990
- 11.市川浩「精神としての身体」勁草書房、1975
- 12.イリイチ、I.「生きる思想」藤原書店、1991
- 13.加藤尚武「環境倫理学のすすめ」丸善ライブラリー、1990
- 14.国立教育研究所生涯学習研究部編「生涯学習化社会の現状」国立教育研究所、1993
- 15.子安美知子「ミュンヘンの小学生」中公新書、1975
- 16.松田義幸「現代余暇の社会学」誠文堂新光社、1981
- 17.松岡信之、徳山郁夫「一般教育としての体育－情報処理能力を視点として」一般教育学会誌、第11巻、第2号、p,118-120、1989
- 18.松岡信之、徳山郁夫「体育における一般教育」一般教育学会誌、第14巻、第2号、p,72-75、1992
- 19.中村雄二郎「臨床の知とは何か」岩波新書、1992
- 20.ポラニー、M.「暗黙知の次元」紀伊國屋書店、1980
- 21.シューマッハ、E.F.「人間復興の経済(スモール・イズ・ビューティフル)」佑学社、1973
- 22.メドウズ、D.H.ほか「成長の限界」(ローマ・クラブ「人類の危機」レポート)ダイヤモンド社、1972
- 23.ソロー、H.D.「森の生活(ウォールデン)」講談社学術文庫、1991
- 23.ピーパー、J.「余暇と祝祭」講談社学術文庫、1988
- 24.ツイアビ演説集「パパラギ」立風書房、1981
- 25.徳山郁夫、松岡信之「ボディ・センサーによるフィールド・ワークとしての体育」千葉体育学研究、第12号、p,51-56、1989

参考文献

- 1.有吉佐和子「複合汚染 上・下」新潮社 1975
- 2.ベル、D.「脱工業化社会」ダイヤモンド社 1975
- 3.ブルーム、A.「アメリカン・マインドの終焉」みすず書房、1988
- 4.カーソン、R.「沈黙の春(生と死の妙薬)」新潮社、1964
- 5.コモナー、B.「なにが環境の危機を招いたか」講談社(ブルーバックス)、1972
- 6.デュボス、R.「人間であるために」紀伊國屋

26. 徳山郁夫、松岡信之「一般教育としての体育の展望 -暮しの中の『からだ学』の提唱-」千葉体育学研究、第14号、p,63-75、1991
27. 徳山郁夫、松岡信之「体育における一般教育 -経験知の位置づけ-」千葉大学教養部研究報告B-25、p,259-265、1992
28. 徳山郁夫、松岡信之「一般教育に求められる
転換 -環境教育とからだの見直しの必要性-」千葉大学教養部研究報告B-26、p,279-284、1993
29. ウォード, B. & デュボス, R. 「かけがえのない地球」日本総合出版機構、1972

(平成5年12月10日受付)